

過食

過食、

---

それにしても、である。

食べ過ぎによる不快感ほど、嫌な物は無い。そうして、食べ過ぎる人間というのもまた、見苦しいものである。

この、食べ過ぎてというのは観念的な比喻ではなく、ご飯を食べ過ぎて、という事である。

お酒を飲み過ぎるというのも、また罪悪であり、実際、たまらなく苦しいものであるが、嘔吐すればスッキリすることもあるし、何より、まだ「許される」のである。飲みすぎちゃったなら仕方ない、と思える。また、度を過ぎて酒を食らうという行為はなかなかデカダンでもあり、その泥酔の姿はどこか美しい。

しかし、ご飯を食べ過ぎて苦しいというのはお話にならない。これほど不体裁で、見苦しい事態は無いと思われる。

食事を摂るという行為は誰しも極めて日常的に行っている事であり、自分のペースや食べられる量などは自ずと知れたものである。誰もが自分の「分」を知っている。

しかし、それを忘れてまで、己の欲望の赴くままに食べまくり、そうして調子に乗った挙句の果て、冷や汗垂らし苦悶の表情を浮かべている図などは、完全に狂人の態であり、見るに耐えない。理性や知性という言葉を微塵も感じさせない、阿呆の図である。

そうして実際、食べ過ぎた時の苦しみときたら、貴方、知ってますか？

逃げ場が無いのである。嘔吐する事も出来ず、そもそも小用に立つ程度の運動もままならず、呼吸をすることさえ億劫で、ただ神にも祈る思いでじっと苦しみが過ぎるのを待つしかない。これ以上の地獄は、ちょっと無いのではないだろうか。

その生理的な苦しみと共に、精神的な苦しみもまた同時に押し寄せる。

健常な自分が墮落した自分を責める、堂々巡りの自問自答はここから始まる。

「ああ、自分は何故こんなに苦しくなるまで食べてしまったのだろうか。馬鹿じゃないのか。ご飯がおかわり自由だから、高い金を払ったから、それが何だって言うんだ。その高い金を払ってまでこんな苦しみを味わっちゃって、これほど無駄で滑稽な事は無いや。

ああ、見栄を張らなければ良かった。沢山ご飯を食べたところで、誰も褒めやしないじゃな

いか。一体誰に対して見栄を張っていたというのか。誰も、私の食事なんかは見ていないじゃないか。

注目されるのは、この残飯だ。どうしても食べきれない、この悲しい一口だ。残したら、きっと指差して笑われる。最初は威勢のいいくせに、仕舞いにゃ残しやがった、と。そうお店の人に言われるに決まっている。言わないまでも、思う筈だ。私が逆の立場だったらそう思う。おかわりをした挙句にお残しとは、これほどの愚行はそうそうあり得ない。

だから、私は、食べるべきなのだ。食べなければならない。この一切れ一口を食べきらなければならない。ああ、ああ、もっと始めから節度を持って、この食に臨むことが出来たなら！食べられるだけ食べて、腹八分目、楊枝で歯を磨きながらごっそうさんと言ひ、左は懐手しながら右手でぱっと暖簾を弾いて陽気に店を出る己が姿。

それを何故放棄したのだ私は！

いや、もうどうにでもなれ。どうとでもしてくれ。私は二度とここの店の暖簾を潜る事が許されなくなっても構わない。お残しの罪でぶん殴られたって、構わない。胃の中をぶちまけていっそ清々するかも知れん。

もう、もういいのだ。自分はよく頑張った。やれることは、これでひとまず、やったのだ。今日のところは店を出て、ともかく今後二度と、こんな間違いは犯さないことだ。ご飯は二杯まで、ご飯は二杯まで」

そんなことを考えながら四杯目のご飯と対峙していたのが、つい二時間ほど前の話だ。先ほどの事である。今は、割と落ち着いて珈琲と煙草をのめるまでに回復した。

それにしても、である。前にも同じ事を考えたような気がする。ならばこの先もきっと同じ事を考えるだろう。

同じ過ちを繰り返す。